高校生の主体的な進路選択をサポートする先生のための

Career Guidance

2011年5月10日発行 第43巻第2号通巻387号

リクルート | キャリアガイダンス 2011.5 No.36

キャリアガイダンス.net http://souken.shingakunet.com/career_g/

別冊付録

グローバル人材に成長するための大学選び

シリーズ『ニッポンの人材～育成と就業の現場』vol.16

ICT化する社会と仕事

未来と世界を変える社会起業家の「甲子園」ルポ

Front Message

岩崎夏海『もしドラ』作者

キャリア教育先進事例

大阪・市立 鶴見商業高校
岡山・県立 岡山操山高校

職業観育成のための体験的学習

青森・県立 大間高校
東京・都立 本所高校
島根・県立 三刀屋高校

リサイクル この本はリサイクルできます

RECRUIT

未来と世界を変える社会起業家の「甲子園」

― 第1回『社会イノベーター公志園』決勝大会報告 ―

地域や日本、あるいは世界全体が直面する課題を解決しようと日々努力している人たちがいます。「社会イノベーター」「社会起業家」などと呼ばれるそうした人たちの全国大会が1月に東京で開催されました。彼ら彼女らの高い志と行動力は、本当にこの社会を変えていくかもしれない。そう思わせるような予感が、終了後の会場に立ち込めました。この大会の熱気を伝えるDVDを希望者に配布します。教育現場でのさまざまな活用をご検討ください（詳細は35p）。

取材・文／荒尾貴正（本誌編集デスク）

日本全国から集まった公志園の挑戦者たち

>> 十勝の農家とともに、日本の食糧危機に取り組む
近江正隆氏（北海道）

>> 障がい者の社会参加支援を通じ、気仙沼を日本一住みやすい街に
● 小野寺美厚氏（宮城）

>> 会津の大人と若者を結び、伝統工芸と地域を活性化
貝沼航氏（福島）

>> ワンコイン健診で、誰もが当たり前に健康になれる社会を
● 川添高志氏（東京）

>> フットサルを通じた地雷原の撤去を、タイ・カンボジアから世界へ
菅原聡氏（東京）

>> 「真っ暗闇での体験」から、人が助け合う社会の復活を目指す
● 志村季世恵氏（東京）

>> 模擬選挙普及を通じ、未来の有権者の市民性を育む
林大介氏（東京）

>> 格差社会の連鎖を断つ。教育機会に恵まれない子どもの学習を支援
● 松田悠介氏（東京）

>> 訪問医療活動を軸に、高齢化時代の社会システムをデザイン
● 武藤真祐氏（東京）

>> 14秒に1人。増え続けるエイズ孤児をアフリカで支援
● 門田珊衣子氏（東京／ケニア）

>> 誰もが気軽に外出できる社会を。高齢者・障害者の旅をお手伝い
佐野恵一氏（京都）

>> 多文化共生に向けて、食材ピクトグラムを全国に普及
● 菊池信孝氏（大阪）

>> 備後いぐさを通じて、日本の農・住・食を地域でつなぐ
● 岡田吉弘氏（広島）

>> プロバスケチームの「圧倒的な感動体験」で地域の元気を復活
星島偉洋氏（香川）

>> 子育て優先の家づくりで、心豊かで健康な暮らしを実現
小川勇人氏（長崎）

>> 都市に疲れた若者と高齢化した離島。新たな交流で日本を変える
山地竜馬氏（鹿児島）

● は決勝大会発表者

出場者や観客が成長し地域を元気にするための大会

2011年1月22日、皇居に近い東京・一橋記念講堂にて第1回「社会イノベーター公志園」決勝大会が開催された。来場者は600人を超え、新しい試みに対する社会的な注目度の高さがうかがえた。

「公志園」とは何か？　統括運営責任者であり、NPO法人アイ・エス・エル理事長の野田智義氏は大会冒頭で次のように語った。

「高校生には夢の舞台としての『甲子園』があるのに、なぜ社会人にはないのか、それがスタートでした」

さまざまな問題を抱えるこの国で、課題解決に燃える人たちの「甲子園」をつくることはできないか。まさにあの「甲子園」のように、参加する選手が成長し、観客や支援者も成長し、応援する街も元気になる。そんな場がつくれたら、どんなにすばらしいだろう――。

そうした着想のもと、100人委員会」（35P）という有志が主体となって10年7月から大会準備に入り、地方予選、公募予選などを経ていよいよこの日、決勝大会を迎えた。出場者は全国から集まった16人。うち8人が活動の現状と今後の計画、大いなる夢を映像を交えて発表した。（左表の●印が発表した8人。うち6人を次ページから紹介する）

野口英世に憧れて医師を目指し、東大医学部を出て、宮内庁侍従職侍医にもなりました。しかしある時、多くの高齢者が孤独な死を迎えることを知り、愕然としました。私がこの状況を変えなければならない。そう決意した瞬間でした。

武藤真祐氏（祐ホームクリニック院長）

～在宅医療を中心とした高齢先進国コミュニティモデルを世界へ～

野口英世のように困っている人をたすける（祐）医師になりたいと6歳で志し、実際に医師となり、循環器内科医としてやりがいのある日々を送っていました。しかしある時、訪問診療で高齢者のアパートを訪れ、荒れた部屋、口数の少ない「孤独」そのものといった老人の姿に衝撃を受けました。恥ずかしながら、その時初めて日本の高齢社会の現実に直面しました。こんなに寂しい姿にさせてはいけない。日本の社会システムを変えなければならない――。強く決意した私はいったん医療を離れ、社会を変える力を身につけるためにコンサルタント会社に入社しました。MBA、米国公認会計士といった資格も取り、力を蓄えて、昨年ようやく在宅専門クリニックを開設。複数の専門医がグループとなり、24時間365日対応しています。医療・介護だけでなく、食品、住居、金融、法律などの企業・専門家が連携し、お年寄りを支援していく「高齢先進国モデル」をつくることが私の夢。人々が将来に希望をもち、安心して年を重ねることができる社会の実現を目指し、その仕組みをつくりあげて、同様の課題を抱える諸外国に対しても安心を拡げていきたいと思っています。

いじめを受けていた私に寄り添い、励ましてくれた恩師がいました。そんな教師になりたくて私も教職に就き、日本の教育をもっともっと変えていくために、米国をモデルにした教師派遣事業を始めました。

松田悠介氏（NPO法人Learning for All代表理事）

～新しい教育のカタチ　新しい教師・リーダーのカタチ～

今でこそがっしりした体格ですが、中学のころは貧弱でいじめのターゲットでした。しかし、「いじめられている原因を一緒に考えようぜ」と言って、常に見守り、励ましてくれる体育教師がいました。恩返しと思って、自分も教師になりました。生徒目線で授業や部活の指導をし、弱かった陸上部を全国大会に導くなど実績を挙げました。しかし自分のような教師は少ないことに気づき、もっと川上から教育を変えられないかと考え、ハーバード教育大学院に留学。そこで「情熱ある若者が困難を抱える学校に2年間派遣されるプログラム」であるTeach For Americaに出合いました。アメリカの大学生の就職ランキングでは、グーグルやアップルを差し置いて、何とこのプログラムが人気ナンバーワンなのです。全米に年間9000人の若者を派遣しているということで、つまりアメリカは、若者が主役となって教育を立て直そうとしているのです。このプログラムを日本流にカスタマイズして、日本全国に広めようとしています。資金面、運用面、不安だらけです。でも教師や子どもに変化の兆しが見えてきました。私はそこに賭けたいのです。

ユニセフの調査によれば、日本の子どもたちは世界一孤独を感じています。これって本当にショックなことですよね。私は暗闇の中を視覚障がい者が案内する「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」を通じて、人は一人じゃないって皆さんに気づいてもらいたいんです。

志村季世恵氏（NPO法人ダイアログ・イン・ザ・ダーク理事）

～まっくらな中で感覚を研ぎ澄まし、対等な対話を～

幼少期に家族の血縁の問題から、「お前なんか生まれてこなきゃよかったのに」と心無い言葉をかけられたこともありました。そんな私に、とある病を患う命短い人が手を差し伸べてくださり、その出逢いが私をセラピストに導きました。悩み多き方々と接するようになり、ある時期から末期がんの方々とのかかわりが増え、共に時を過ごして看取る「ターミナルケア」に携わるように。20～40代で、「なぜ自分だけ？」と深いショックを受けている方々と日々過ごしていると、人を信じること、思いやることのすばらしさといった人生のとてもシンプルな幸福に徐々に皆さんが気づかれるのが手にとるようにわかります。「でも私には時間がない。季世恵さん、このことを元気な人たちに伝えてください」。そんなふうに、私は多くの方からバトンを渡されました。どんなふうに伝えようかと考えていた時、ダイアログ・イン・ザ・ダークと出逢いました。暗闇ですべての人が対等になるソーシャルエンターテインメントです。体験すると、「人ってあったかいんだな」「私は人が好きだったんだな」と改めて気づかれる人がたくさんいます。私はこれを社会に不可欠なインフラにしたい。誰もがかけがえのない存在だと知ってほしいのです。

エイズは人の命を奪うだけでなく、親を失った「エイズ孤児」を1500万人も生み出しています。「あの子に触れちゃだめ」「あの家には悪魔がいる」…あらゆる偏見から人として扱われなくなります。そんな子どもたちの居場所をつくりたい。笑顔を見たいのです。

門田瑠衣子氏（エイズ孤児支援NGO・PLAS代表理事）

～14秒に1人。増え続けるエイズ孤児をアフリカで支援～

ボランティアで発展途上国に赴いた時にエイズ孤児という存在を知りました。本人には何の責任もないのに、不当に差別され苦しむ子たち。「あの子と遊んじゃだめ」と周囲にうわさされるその子らは、14歳の時の私自身でした。私は中学でいじめに遭い、一番仲の良かった友達も私から離れていきました。でも私には支えてくれる両親がいました。しかしエイズ孤児には誰もいません。こんな状態を放置しておく社会はおかしいと、私は思いました。孤児たちをやさしく受け入れ、エイズ予防教育を行えるような学校づくりをウガンダでスタートしました。しかし現地ではさまざまな反対や圧力があり、大工は法外な報酬を要求し、電気、水、ガスのない気温40度を超える地の建設工事は困難を極めました。ところが工事を進めるうちに、現地の人々の考えが変わっていきました。この地域の問題だと思うようになったのです。レンガを持ち寄る人が増えました。ある日、大工の棟梁が「もう今日から給料いらない」と言いました。そして他の大工も説得し始めました。「だってこれは、我々の問題だから」。そうしてこれまでに3つの小学校支援、9つの校舎建設などを行ってきました。この事業をもっともっと拡大していきます。

二人の息子には知的障がいと身体障がいがあります。でも彼らは「障がい者」として生まれてきたわけではなく、人間として生まれてきたのです。親亡き後も、地域のなかで、自分らしく暮らせる未来を残してあげたい。その一念で活動しています。

小野寺美厚氏（NPO法人ネットワークオレンジ代表理事）

～障がいのある人も、障がいのない人も、みんながまちづくりの主役だ!～

私の子育ては社会との闘いでした。病院、学校、行政…子どもたちをありのままに受け入れてくれるところが少なく、悔しくて、情けなくて、毎日涙が流れました。子どもたちは障がいがありながらも、頑張って育ってくれました。元気ならそれでいい、あとは私の仕事です。「自分でやるしかない」と決意しました。障がいのある人もない人も、みんな一緒になってまちづくりをしたい。新しい福祉のあり方を社会に発信したい。そう考えて10年以上前から気仙沼で活動を始めました。最初はフリーマーケットで資金をつくり、それを障がい者の社会参加支援に当てていきました。「障がい者を地域に」とは言っても、口で言うほど簡単じゃありませんでした。挫折も失敗もたくさんありました。でも、多くの方々との出会いがさまざまなことを教えてくれ、無限大のパワーをくださいました。年老いれば誰しも「障がい」を抱えるようになります。だから福祉はみんなの問題です。今は福祉と経済がうまく連動するような、「幸せと地域経済の融合ビジネス」の仕組みを作りあげようとしています。フリースクールも立ち上げたいと思います。私の生涯をかけて、夢と希望にあふれる社会を創っていきます。

成人4000万人が健康診断を受けていません。このために生活習慣病だとわからず、足を切断したり、透析を受けるようになる人が後を絶ちません。皆さんに健康診断を受けてもらうのが私の使命。「500円健診」を全国に広めます。

川添高志氏（ケアプロ株式会社　代表取締役）

～日本初のワンコイン健診を健診弱者に広めます!～

高校までは「いい大学」、「いい会社」に入ることを目指していました。しかし高校時代に父がリストラにあい、大企業志向は消えて、将来は「社会に必要な仕事を作っていける人間になろう」と決意しました。看護師となり、大学病院の糖尿病病棟に勤務していた時、35歳フリーターの人が入院してきました。会社に健康診断がなかったようで、糖尿病が進んでおり、ただちに足を切断することになりました。そして間もなく失明もし、人工透析も週3回受けることになり、働くことができずに生活保護を受給されるようになりました。年間600万円の医療費は税金でまかなわれるようになったのです。ご本人にとって、とてつもない不幸であるとともに、社会にとっても大きな不幸であり、大きな負担です。そういう患者さんたちに、どんな健診であれば受けるようになるかと私はヒアリングしました。「安く」「予約が不要」「その場で結果がわかる」…そういった意見をもとにして、考えに考え抜いて「ワンコイン健診」を考え付きました。そして、大学時代からの貯金をすべて使い果たして起業しました。お客さんは多くありません。2年間で4万人が利用してくださいましたが、4000万人の0.1%。まだまだこれからです。

表彰される武藤氏と称える出場者たち（左）。ひとつの会場では間に合わず、モニターで観戦する第2会場も必要とするほどの盛況ぶりだった（中）。小野寺氏の応援に気仙沼から駆けつけた支援者の皆さん（右）。

一番共感された人が代表受賞者

「先義後利」という言葉があるが、それが公志園の哲学だという。道義を優先し、利益を後回しにしなければ、社会を変革するような活動の輪は広がらない。だから、この大会に賞金はない。発表に向けて自らを成長させる場、自らの志を世に問う場、そして共感・支援の輪を広げる場としてこの公志園がある。参加者は当初からそう理解して参加し、観客もそのつもりでこの場の発表を聞いた。

8人の発表が終わると、観客は最も共感した、あるいは最も応援したくなった人を1人選んで投票。審査委員による審査を加え、第1回代表受賞者は、高齢化時代の社会システムをデザインする武藤真祐氏（祐ホームクリニック院長）に輝いた。

また、審査員特別賞を障がい者の自立支援を通して気仙沼の街づくりを目指す小野寺美厚氏（ネットワークオレンジ代表理事）、ワンコイン健診で誰もが健康になれる社会を目指す川添高志氏（ケアフロ代表取締役）、「真っ暗闇の体験」で人が助け合う社会を目指す志村季世恵氏（ダイアログ・イン・ザ・ダーク理事）の3人が受賞した。

代表受賞者の武藤氏は、あらためて次のような決意を語った。

「私はフリーライダー（ただ乗りする人）にはなりたくないと考え、生きています。先人の努力の上にある現在の社会に生きる私は、次の世代に、よりよい社会を受け継ぐために新しいものを生み出す使命があると思っています。来たる高齢社会を、豊かで希望あるものとするために、これからも一層尽力して参ります」

この大会は学習教材になる

6時間にも及んだ第1回大会が大盛況のまま幕を閉じ、早くも来年度の開催が決定、準備が進められているという。第1回大会の模様はDVDに収められ、TSUTAYAにてレンタルされるほか、高校を始めとする全国の教育機関などに寄贈することを予定している。

「社会イノベーターという生き方はものすごく厳しく、子どもたちに安易に勧められるものではありません。しかし、そういう生き方があることや社会の課題との向き合い方、リーダーとしてのあり方など、学べるところは大いにあるでしょう」（野田氏）

大会DVDプレゼントのお知らせ

第1回『社会イノベーター公志園』のDVDを希望者にプレゼントいたします。内容は大会当日のダイジェスト映像、決勝大会出場者8人の発表、全国大会出場者16人の紹介動画、公志園の企画立案から現在までの活動ストーリー映像に加え、東日本大震災で甚大な被害を受けた気仙沼地域および東北地方への復興支援メッセージなども盛り込まれる予定です。

このDVDを希望される方は、巻末のはがきに希望枚数などを記入し、お申し込みください。9月頃発送の予定です。

※在庫がなくなり次第、受付終了とさせていただきます

全国大会運営体制

● 主催

2010社会イノベーター公志園100人委員会

【実行委員長】長谷川 閑史（武田薬品工業 代表取締役社長）

【副実行委員長】小城 武彦（丸善 代表取締役社長）、加藤 哲夫（せんだい・みやぎNPOセンター 代表理事）、立野 純三（ユニオン代表取締役社長、関西ニュービジネス協議会会長）、野田 智義（アイ・エス・エル 理事長）、橋田 紘一（九電工 代表取締役社長、九州アジア経営塾 副理事長）

【特別顧問】鈴木 寛（参議院議員、文部科学省 副大臣）

【審査委員長】藤森 義明（日本GE 代表取締役社長兼CEO）

【共同審査委員長】小宮山　宏（三菱総合研究所理事長、東京大学総長顧問）、笹森 清（労働者福祉中央協議会 会長　内閣特別顧問）、細川 佳代子（NPO法人勇気の翼インクルージョン2015理事長）、

● 運営事務局

NPO法人アイ・エス・エル　社会イノベーションセンター

● 後援

内閣府／外務省／経済産業省／公益社団法人経済同友会／独立行政法人国際協力機構（JICA）／社団法人関西経済同友会

● 全体協賛

三井物産株式会社（中核協賛企業）／株式会社リクルート（中核協賛企業）／サントリーホールディングス株式会社／株式会社日立製作所／株式会社ミスミグループ本社